

金堂円隆寺跡

金堂円隆寺は、平泉を治めていた藤原 2 代基衡（1105–1157）の命で、建設がはじまったと言われています。このお堂は、毛越寺の重要なお堂でした。

鎌倉時代（1185–1333）に編纂された歴史書『吾妻鏡』には、奥州藤原氏が栄華を誇ったときの、寺の様子が触れられています。それによると、「金堂円隆寺は金銀をちりばめ、紫檀赤木を継ぎ(銘木で作られ)、万宝を尽くした荘厳さで、本尊として尺丈六(2.43m)の薬師如来、十二神像を安置してあった」とのことです。

金堂円隆寺は、癒しの仏、薬師如来を祀っていました。薬師如来は、日本初の玉眼入りの仏像であったということです。建物と、記録にある仏像は残っていませんが、大泉ヶ池を挟んで南大門の向かいのこの場所にいまに残る巨大な礎石が、この歴史的に重要な寺院の規模の大きさを示唆しています。